

『まちの記憶を取り戻すまちづくりの研究～小諸市の北国街道～』

2026/01/17

12206037 渡邊 美咲

私の地元である、長野県小諸市のまちづくりについて研究しようと考えました。具体的には、北国街道の公共空間をリノベーションし、地方ならではの特色を生かした再生計画を提案します。

テーマは、『小諸ならではの“歩きたくなる道”の提案～北国街道の再生計画～』です。あえてローカルな場所を対象とすることで、都市部で一般的に見られる空間とは異なる、新たな発想や形が生まれると感じています公共空間のデザインといっても、必ずしも一つの標準化された製品に収束するわけではありません。その土地ごとの特性や暮らしに寄り添った製品や空間を見つけ出すことが重要だと考えます。そこで、小諸市という地域性を生かしながら、より過ごしやすく魅力的な公共空間を提案していきたいと思います。

【小諸市を選んだ理由】

私は小諸高校に進学したことをきっかけに、小諸市に毎日通うようになりました。もともと東御市に住んでいたため、小諸市には遊びに訪れることも多かったのですが、通学を通じて、以前は気づかなかった街の一面が見えるようになりました。

その中でも特に印象的だったのが、ユニバーサルデザインが取り入れられているにも関わらず、実際には十分に活用されていない場面が多いという点です。例えば、点字ブロックが設置されていても、その先の傾斜が急で車いすでは通行しづらかったり、音声付き信号機が押しボタン式であることが分かりにくかったりと、利用者の視点が十分に反映されていないと感じることがありました。

こうした日々の気づきを通して、私は「見た目だけでなく、誰もが安心して使える、暮らしやすい街づくり」に関心を持つようになりました。単に設備が整っているだけでなく、本当に誰もが使いやすいよう工夫された小諸市をつくりたいという思いから、この地域に関わりたいと考えるようになりました。

また、小諸市は城下町であるにもかかわらず、歴史を感じられる建築が年々減ってきているように感じています。参勤交代で利用されていた北国街道が残っているにもかかわらず、その沿道にはコンクリート造の建物が多く、街の歴史的な魅力が十分に活かされていない現状があります。日本で唯一「穴城」と呼ばれる小諸城を有する都市として、もっと観光客が訪れる、知名度の高い市になってもよいのではないかと感じました。



さらに、小諸市ならではの発酵文化や音楽といった地域資源を体験できる施設があれば、街の魅力をより深く伝えられるのではないかと考えています。

【小諸城（懷古園）】

小諸城は、千曲川の侵食によって形成された河岸段丘の地形を巧みに利用した城郭であり、城下町よ

りも低い位置に主要郭を置く「穴城」として知られる。小諸城が日本で唯一といわれている。この立地により、城は周囲の高低差そのものを防御とし、石垣・空堀・土塁が連続する立体的な城郭景観を形成している。天守を設けず、三の門や大手門といった門建築を要所に配置する構成は、城への進入体験を段階的に演出する空間装置として機能していた。北国街道は城郭外縁に沿って通過し、城下町の商業活動と密接に結びつくことで、軍事・交通・生活が重なり合う都市構造を生み出した。現在は懷古園として公開され、城郭遺構と街道沿い町並みが連続して認識できる点に、小諸特有の景観価値が見出される。

【北国街道とは】

北国街道は、日本の街道の一つだ。江戸幕府によって整備された脇街道で、中山道の追分宿から分岐して高田（新潟県上越市）さらに出雲崎に至る街道を言うのだ。北国脇往還ともいい、善光寺を経由するため善光寺道とも言うのである。軽井沢町から上越市までの区間は現在の国道 18 号にほぼ相当している。



なお、北陸地方全体を通して「旧北国街道」を「滋賀県の鳥居本から長野県の追分までを結ぶ街道」とする文献もある。加賀藩領内などでは北国街道のうち、東方の江戸へ向かう道筋を下街道、西方の京都へ向かう道筋を上街道とも呼んでいた。前者の江戸とつなぐための道は北陸の諸大名が参勤交代に利用したため「加賀街道」と称され、これが北国街道の別名とされることもある。江戸時代には、幕府の財政を支えた佐渡金山の金がこの道を通り江戸へ運ばれていた。また、日本海を往来した「北前船」が運ぶ蝦夷地（北海道）の昆布や塩鮭などの海産物、さらに上方の文化が越後の港から北国街道を通じて信州へ届けられ、人々の暮らしを豊かにした。

明治時代に入ると、この街道は日本の近代化を牽引する「絹の道」として発展した。しかし、世界恐慌や化学繊維の普及によって製糸業が衰退すると、多くの企業は味噌醸造業へ転業したのだ。その後、関東大震災や太平洋戦争で首都圏が大きな被害を受けた際、この地から運ばれた味噌が支援物資として広まり、「信州味噌」の名が全国に知られるようになった。



米や大豆が、目に見えない微生物の働きによって酒や味噌へと姿を変える「発酵」は、当時の人々にとってまさに神秘的な営みであったのだ。

【方向性・主な取り組み】

現在の北国街道は歩車分離がされておらず危険であるため、観光客・住民ともに利用する人が少なくなっている。そこで本計画では、北国街道を部分的に取り上げながらリノベーションし、今後の改善につながる案を検討した。

北国街道の近くには国道や大通りがあるため、車の通行量は元々多くない。この特徴を活かし、交通規制を行って歩行者優先とし、ウォーカブルなまちづくりを目指す。また、人通りが減ったことで失われつつある昔ながらの景観を取り戻し、歩きたくなる道として再生する。

「小諸ならではの」という視点からは、発酵 × 音楽 × 体験（食べる／買う／体験する／遊ぶ）を組み合わせ指定したエリアの配置・案・デザインを考えた。北国街道の利用が減った背景には「運ぶ」という行為がなくなったことが一因だと考えられる。そこで、かつて街道で運ばれていた発酵食品に着目し、空き家をリノベーションして発酵をテーマにした施設として活用する。また、昔から受け継がれてきた発酵文化を体験できる施設の整備も計画した。右の写真に示したエリアを対象に計画を行い、そこから段階的に新しい街の発展へとつながる先例となるような計画を目指す。



【北国街道建築の特徴】

長野県小諸市は、江戸時代に北国街道の宿場町として栄えた城下町である。小諸宿は交通と物流の要衝として発展し、商家、味噌醤油蔵、脇本陣・本陣など、各種の建築が集積した街並みとなった。これらの建物は主に木造を基本とし、屋根は瓦葺き（葺瓦）であることが多い。また、外観は街道景観と調和するように切妻造を採用し、町屋形式で2階建てが目立つ特徴がある。代表例として、旧北国街道沿いの「旧本陣（本町・市町）」は葺瓦葺きの切妻屋根をもち、2階を太い出桁で街道側へ突出させた構造が特徴だ。江戸末期～19世紀初期に建てられ、建築様式としては宿場町特有の商家・旅籠の形式を残している。隣接して旧脇本陣「糸屋」もあり、格式ある玄関屋根や掛け看板に唐破風を用いた装飾が見られるなど、身分や用途の違いが建築詳細に表れている。

また、大正期以降の町屋建築として「北国街道ほんまち町屋館」などがあり、木造二階建て・切妻造瓦葺で、2階通り側に大きな座敷空間を設ける伝統的町屋形式を残している。漆喰塗の鉢巻きや重厚な外観が、歴史的景観の連続性を保っている点も特徴だ。

江戸時代の古民家建築として、旧藍染め屋敷を再生した「はりこし亭」は、木造平屋・切妻造で、土間や室内の檜材使用など伝統的な内外装がよく保たれている。こうした建物は単なる形式復元ではなく、再生・移築・用途転換を通じて現代利用に耐える形で保存されている。



『小諸ならではの』 発酵×音楽×体験

【発酵】

小諸市には古くから、ワイン、味噌、醤油、酢、塩麴、甘酒、漬物、パン、日本酒など、多様な発酵文化が根付いている。発酵食品は保存性が高く持ち運びやすいため、北国街道を歩きながら購入・体験できる点で街道空間との相性が良い。また、おせちやなれずし、笹団子といった季節の保存食とも結びつき、暮らしの知恵として受け継がれてきた文化である。

取り入れる施設

- ・発酵施設：発酵の仕組みや微生物の働きを学べる展示・学習空間
- ・発酵体験：味噌づくり、漬物、日本酒など小諸にゆかりのある発酵食品を実際に仕込む体験
- ・発酵飲食店：発酵食品を取り入れた食事を提供し、健康や食文化への理解を深める
- ・セレクトショップ：地域の発酵食品や関連商品を販売

01.小諸市と発酵文化の歴史

小諸市は、寒暖差のある気候と千曲川流域の水資源に恵まれ、古くから発酵文化が根付いてきた地域である。味噌や醤油、日本酒などの発酵食品は、保存性を高めるための生活の知恵として発展し、宿場町として栄えた北国街道沿いでは、旅人や地域住民の食を支えてきた。発酵は特別なものではなく、日常の食文化として人々の暮らしに深く関わってきた点が小諸の特徴である。

02.気候・風土と発酵の関係

小諸市は標高が高く、夏と冬の寒暖差が大きい内陸性気候を持つ。この環境は微生物の活動を穏やかにコントロールしやすく、味噌や漬物、日本酒などの発酵食品づくりに適している。冬季の低温は発酵をゆっくり進め、旨味を引き出す役割を果たしてきた。こうした自然条件と人の営みが重なり合うことで、小諸ならではの発酵文化が形成されてきたと考えられる。

03.イメージしたラフスケッチ

発酵食品づくりに欠かせない「樽」をモチーフとしたデザインとした。樽は、味噌や醤油、日本酒などの発酵過程において、微生物の働きを受け止め、時間をかけて熟成を促す重要な存在である。本計画では、この「包み込み、育てる」という樽の役割に着目し、空間全体に曲線的で包容力のある形態を取り入れた。発酵が進む過程そのものを空間体験として表現することを意図している。

04.現在に受け継がれる発酵産業

現在の小諸市には、味噌蔵や酒蔵、ワイナリーなど、伝統を受け継ぐ発酵関連産業が点在している。これらは単なる食品製造にとどまらず、地域の歴史や技術を伝える存在でもある。また、地元産の農産物を活用した商品づくりも行われており、発酵を通して農業や観光との連携も生まれている。発酵は地域経済と文化を支える重要な要素となっている。

【音楽】

小諸市は、長野県内で音楽教育が盛んであった歴史や、多くの芸術家が活動してきた背景から「音楽のまち」とも呼ばれてきた。参勤交代の大名行列では、笛や太鼓、掛け声などの音が街道に響いており、音は街の記憶として存在していた。本計画では、こうした歴史的な音の要素を現代的に再解釈し、街中に取り入れる。発酵中の食品に音楽を聴かせる実験的な試みや、微生物の活動、温度変化、泡立ちなどを音として可視化・可聴化することで、音楽と発酵が融合した新しい体験を創出する。

取り入れる施設

- ・発酵×音の実験施設：発酵と音の関係を体験・観察できる空間
- ・飲食店：音楽を聴きながら食事ができ、地域の学生やアーティストが演奏できる場
- ・音楽ホール：地域住民や来訪者が気軽に発表・交流できる小規模ホール

01.音楽のまち・小諸

長野県小諸市は、「音楽のまち・こもろ」を掲げ、音楽を通じたまちづくりを進めている。市内では作曲コンクールやコンサート、ミニライブなどが継続的に開催され、音楽が日常の風景として人々の暮らしに溶け込んできた。また、小諸市内の学校では音楽教育や吹奏楽・合唱活動が盛んで、子どもから大人まで世代を超えて音楽に親しむ環境が整っている。市民参加型のイベントも多く、演奏する側と聴く側の距離が近いことも特徴である。こうした音楽文化の背景には、北国街道をはじめとする歴史的な街並みと、人々の暮らしが生み出してきた音の記憶がある。かつて街道沿いでは、人の往来や生活の営みに伴うさまざまな音が重なり合い、日常の中に自然なリズムや響きが存在していた。

本研究では、北国街道で流れていたと考えられる音の風景に着目し、それらを現代の音楽として再構築することで、小諸の歴史や空間の魅力を新たなかたちで表現することを試みている。

02.イメージしたラフスケッチ

小諸城の特徴である高低差のある城郭地形を活かし、ステージを観客席より低い位置に設置する計画とする。これにより、観客は城の地形に沿って音楽を見下ろす構成となり、小諸城ならではの空間的特性を体験として取り込むことができる。また、歴史的景観を背景としながら、音と人の関係性を立体的に捉える場の創出を目指す。

03.北国街道に流れていた音を、現代の音楽としてつなぐ

本卒業研究では、長野県小諸市の北国街道を舞台に、かつて参勤交代で流れていたと考えられる音を手がかりに音楽制作を行った。北国街道は、人や物が行き交い、宿場街を中心に生活の営みが重なっていた場所であり、太鼓、足音、掛け声など、日常の音が街道の風景を形づくっていたと考えられる。

本制作では、そうした歴史的・環境的な音の要素を想像的に再構成し、現代的な音楽表現として可視化・可聴化することを試みた。音そのものを再現するのではなく、当時の空間構成や人の動き、街道に流れていた時間のリズムを抽象化し、楽曲として表現している。音楽を通して北国街道の記憶を呼び起こすことで、過去の暮らしと現在の小諸をつなぎ、歴史的空間の新たな捉え方を提示することを目的としている。実際に、いつでもどこでも音楽を聴くことができるキーホルダーを制作した。

【体験】

街道全体を「体験の場」として捉え、点在する施設を歩いて巡ることで、多様な学びと交流が生まれる構成とする。体験を通じて、感性を育て、地域の人と関わり、環境や食、命の循環について考えるきっかけを提供する。

取り入れる体験

- ・発酵体験：世界に一つだけの発酵食品をつくる
- ・手打ち体験：そば打ちを行い、その場で食べる体験
- ・農業体験：発酵体験や飲食店で使用する大豆や野菜を育て、食の循環を学ぶ

01.発酵体験施設

発酵体験施設では、小諸市に根付く味噌、醤油、日本酒、漬物などの発酵文化を、学びと実践を通して体験できる場をつくる。仕込みや熟成の工程を実際に行うことで、発酵が時間と環境によって変化する過程を身体的に理解することができる。また、発酵に関わる微生物や温度、湿度といった要素を空間演出として可視化し、知識だけでなく感覚的に学べる施設とする。地域の食文化を未来へ継承する拠点として位置付ける。

02.交流学习体験

交流・学習体験施設は、地域住民と来訪者が自然に交わる拠点として計画する。ワークショップや展示、発表の場を設けることで、発酵や音楽、ものづくりを通じた学びと交流を促す。世代や立場を超えた人々が関わることで、新たな価値や活動が生まれる循環を生み出すことを目指す。北国街道沿いの立地を活かし、日常と非日常が交差する体験とする。